

令和7年度 学校評価

前年度の重点目標	自ら考え、自らの目標に向かって主体的で積極的に学び続ける習慣を身に付けさせ、これからの複雑で多様な社会を生き抜くため、多くの試練に挫けない心を育てる。また、思いやりと公共心を身につけさせ、礼儀正しい行動や言動をさせるなど、看護や福祉に関わることのできる社会人の育成を目指す。		
項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
総務部	広報活動を活性化することで学校、保護者、地域とのつながりを強化する。	学校の重要な情報やイベントの告知を保護者や地域社会に届けられるよう広報の在り方を検討する。	P T A機関紙「ほうりょう」の内容について検討し、学校の様子がより伝わるよう写真を多く掲載し発行した。学校案内では他の分掌や部活動顧問、各教科に協力を依頼しながら発行の準備を進めている。今回変更した内容について振り返り、検討を重ね引き続き、修正していく。
		地域社会における学校の認知度を高めていく。	P T A機関紙は地域へも配信しているため個人情報の保護については十分に留意し発行することができた。また、地域社会における認知度を高めていけるよう機関紙や学校案内の内容を検討することができた。生徒の活躍を幅広く紹介できるように広報の方法について工夫する必要がある。
教務部	自ら学び続ける態度と姿勢を育成する。	ICTを活用し、より主体的な学びの実現を図る。	あいちラーニング重点校を契機として、学科、教科でICTの効果的な活用を進めている。ICTでいうならばデジタル採点を導入し、新たに活用を進めている。ただし、1年でできることには限りがあり、効果的な活用ができるようになるまで時間がかかる。
		スクールポリシーの具体化に向けて	スクールポリシーの制定から、順次教育課程、評価と見直ししてきた。本年度からは、近年の志願者の減少傾向を把握し、それに応じたスクールポリシーの見直しをしていく。アドミッションポリシーの充実のため、新たに中学校の先生向けの学校説明会などを活用したい。
生徒部	生徒が自ら考え、判断し、行動する能力を育成する。	生徒集会や諸活動・行事を主体的に運営する力の育成を図る。	昨年度から継続して、生徒会主幹の行事の企画・立案から実施に至るまで、生徒会役員主導で行うことができた。生徒会役員への立候補者の減少が顕著であり、活動の楽しさを全校生徒へ周知する機会を充実させていく必要がある。
		T P Oに応じて、主体的に身だしなみが整えられるよう指導する	外部講師を招聘して、1年生には制服について、3年生には成人としての正しい着こなしについてセミナーを実施した。身だしなみに対する意識の向上の一助になった。本校は衛生看護科の生徒が専攻科へ進学するため、その点を踏まえた内容の精選が必要である。
進路部	「前に踏み出す意識」を引き出す指導を目指す。	就職・進学指導を通して、主体的な進路選択とその実現のための思考と行動を促す場面や材料を提供する。	指導は計画通り行った。看護師採用試験の早期化・難化に対して、内規の改正を行い、専攻科1年生に対して3つの講座を新設することにした。本年度は試験的に1講座を実施した。予想外の事態もあったが、専攻科は全員、本科はほとんどの生徒の進路が内定している。しかし、一方で3年生で2回目の採用試験でも不合格になる生徒が現れた。今後このような生徒が増えることが予想されるので、何ができるか考えておきたい。
		社会人としての基本的なマナーやコミュニケーション能力を身に付ける指導をする。	面接指導に関して、専攻科学生には間もなく社会人になるという意識が見られた。本科でも十分な準備をして臨む生徒も見られた。一方指導の効果が感じれない生徒もおり、面接指導時に限らず日常の場面での一般的なマナーの指導が重要だと認識しているが、それを受け付けない生徒が増えていることが現在の本校の問題と考える。
保健厚生部	生徒が自ら進んで心身の健康づくりをおこなうために必要な資質・能力を育成する。	生徒が、健康的で規則的な生活行動を身につける。	公衆衛生学等の授業にがん教育を題材にした内容を取り入れた。生徒の振り返りから、自らの健康を適切に管理し改善していく力の育成の一助となった。生徒の心身の保持増進のための資質・能力の育成に向けて、がん教育を題材に教科等横断的な視点での機会を確保する。公衆衛生学に系統した授業展開の充実のために、教材開発や外部教材の活用を検討する。
		生徒が悩みや困り感を発信でき、適応課題に適切に対応できるよう相談や支援を行う。	生徒の悩みや困り感を早期に発見できるよう、校内での連携を図った。また、組織で協力して支援できるよう個別の指導計画を適時更新し、周知徹底を図った。ソーシャルスキルトレーニングを各学年実施した。SNSにおける人間関係の困りごとや悩みについては、生徒部の発達支持的指導と連携する。S S TでもSNSを取り上げ全学年実施を検討する。
学校いじめ防止基本方針に基づく取組	いじめの未然防止及び早期発見に対する取組を充実させる。	いじめ防止基本方針に基づき、生徒一人一人の小さなサインを見逃さず迅速かつ適切に対応する。	いじめ不登校特別支援委員会を毎月定例開催し、全職員と情報共有することで、小さな変化やサインを見逃すことなく対応することができた。ソーシャルスキルトレーニングの活用に期待するとともに、いじめを予防するための教育活動を再考し、さらなる取り組みの推進に繋げていきたい。

項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
1年	話をしっかりと聞き、内容を理解する力を身に付けさせ、学習習慣の確立や基本的な生活習慣の確立を図る。	話をしっかりと聞き、指示や内容を理解する力を養う。	概ねの生徒が、具体的指示をしてすぐの行動はできるようになった。また、課題を早めに取り組もうとする意識付けはできた。課題の提出期限に出せない生徒のうち、話を聞く姿勢がないことが原因の生徒が一定数いた。これからは話を集中して聞けるような工夫が必要である。
		健康管理に留意して学校生活に適應できるように指導する。	夏季休暇中の補充授業や校外実習、学校行事などへもほとんどの生徒が出席できた。概ねの生徒は健康管理に留意でき、学校生活に適應できていたと考えられる。しかし、月曜日や連休明けに遅刻する生徒が比較的多かった。家庭とも連携をしながら体調管理をし、遅刻を減らし授業への参加率を高めていきたい。
2年	望ましい勤労観や職業観の形成及び学校活動への主体的に取り組む姿勢を養う。	個に応じた指導を充実させることにより、学習意欲や規範意識の向上を図る。	進路も具体的な目標が出てきており、進路実現に向けての行動や、実習や日々の学習に対する意識の向上も見ることができた。学習に集中できていない生徒や進路も漠然としている生徒もまだ見られるため、個に応じた指導を継続していく。
		多様化する生徒に対応しつつ、主体的かつ積極的に学校行事等へ取り組む姿勢を育成する。	主体的に行動し、各集団での中心として活躍する生徒も見られるが、多くはまだ周りに任せて主体的な行動が苦手だと考えられる。一部の生徒が活躍するだけではなく、時々に応じて、多様な生徒が活躍できるように場を整え、主体的に行動する力をつけさせていく。
3年	成年としての自覚と責任をもたせ、主体的に社会貢献する態度を養う。	最上級生としての自覚をもたせ、他学年の模範となるような責任ある行動力を育成する。	校外実習や授業など、さまざまな場面で生徒が自ら考え、行動する機会を設けることで、主体的に行動する力が身に付くよう努めた。学校行事などの活動においては、最上級生としての責任を感じながら物事に取り組もうとする姿勢が見受けられた。最終学年としての意識が十分でなく、周囲に与える影響を深く考えずに発言、行動する場面もみられたため、最上級生として他学年の模範となる言動がとれるように指導していく必要がある。
		主体的に社会や地域の発展に貢献しようとする態度を養う。	自らの良さを活かした進路の実現に向けて個別面談を実施し、希望の進路を実現できるよう指導に努めた。進路指導の中で、社会や地域の発展に貢献しようとする意識を向けさせることができた。さまざまな経験を通して社会や地域に関心をもち、それらの発展に貢献しようとする態度が身に付くよう指導していく必要がある。
衛生看護科	主体的に学び続ける力と人や社会を大切にできる人間性を育成する。	協同学習を通して、主体的に学び続ける力を育成する。	協同学習や看護臨地実習など多様な場面で自ら気づきや理解力を育成するよう丁寧な指導を心掛け授業を展開した。『ふりかえ朗くん』、ロイノートなどICTを活用した授業を継続して行い、視覚的理解から思考力を深められるような授業を行った。生徒が積極的に授業に取り組んでいる姿勢はみられるようになり、ICTを活用した協同学習は各学年で定着した。さらに生徒の主体性を深められるような授業展開を目指していく。
		地域社会との関わりや学校行事を通して、看護職者としての自覚や誠実な態度を養う。	校内行事や看護臨地実習など、各学年がこれまでの学習を生かし様々な体験を経験している。2、3年生では臨地実習を経験したことで看護について自分なりに考え、自覚を持つことができ、社会性の向上が図れた。1年生は十分に生活習慣の確立ができず、自己の看護観を考える機会や様々な経験を通して看護職者としての必要な態度が身に付くところまで指導することができなかった。様々な機会を生かして指導に努めたい。
福祉科	専門的な知識・技術の定着及び介護福祉士として必要な資質を育成する。	学習に目標を持って取り組む姿勢を培うと共に、より実践的な対応力を養う。	介護職員初任者研修や介護福祉士国家資格の取得に向けて始業前や授業後を活用し、学習に目標を持って取り組めるよう個々の状況に応じた指導を行った。ICTの活用方法が画一的になりがちであるため、多様な活用法や新しい介護教育を模索し、より実践的な対応力が身に付くよう指導していく。
		福祉科行事や校外実習での体験的な学習等を通して、介護福祉士として必要な資質を身に付ける。	介護実習での体験的な学びを通して、多くの気づきを得ると共に、他者の気持ちを思いやることのできる人間性を育むことができた。自ら考える力や他者の立場を考えて行動する力を養えるよう指導するとともに、多様な活動を通してコミュニケーション能力の向上を図れるよう支援していく。
専攻科	主体的な学びと思考により、社会の変化に対応する能力や専門職業人としての自覚と責任を養う。	看護職に求められる人間性を理解させ、学生が自ら考え行動できるようにする。	看護職に求められる人間性を理解し、主体的に考え行動する力を少しずつ身につけてきている。臨地実習において患者の状態を観察し、必要なケアを自ら提案する姿や、グループワークで役割を積極的に引き受け、意見交換を通じて解決策を考える場面が見られるようになった。今後は、こうした主体的な取り組みをさらに広げ、実践力を高めることができるように指導に努めたい。

項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
専攻科		専門的な知識と技能を習得するために必要な学習に取り組み、看護師国家試験の全員合格を目指す	専門的な知識と技術の習得に向けて主体的に取り組めた。授業や演習では、看護技術の基本操作を繰り返し練習し、臨地実習では患者の状態に応じた適切なケアを実施する姿が見られた。また、国家試験対策として、弱点克服に向けた学習計画を立てるなど、全員合格を目指す意識が高まっている。今後は、知識と技術をより確実に定着させ、臨床現場で応用できる力をさらに伸ばせるよう指導に努めたい。
勤務時間の適正な管理及び長時間労働による健康障害防止の取組	教職員の勤務時間を適正に管理し、勤務間インターバルの確保を目指す。	在校時間等の状況記録の結果を活用し、業務の適正化を図るとともにストレスチェックの結果の活用や高ストレス者に対する医師の面談指導を通じて教職員の確実・適切なメンタルヘルスへの保持に努める。	令和6年度の時間外在校時間のデータを校務分掌、学習指導、生徒指導、部活動指導の4つに分類し分析した。5、6、11月の学習指導が上位を占めた。これは、専門学科の特色により校外実習等で勤務地を離れることや、戴帽式等に係る業後指導、考査準備とその処理により授業時間帯に教材研究等を行う時間を充分にとることができないことが挙げられる。そこで、働き方改革進捗状況チェックシートを基に教職員の意識改革と業務改善の推進に取り組んだ。特に、グループウェアの利活用による職員朝礼のオンライン化の充実、デジタル採点システムの推進、各種アンケート集約の電子化により1か月45時間越80時間以下の教員は7.81%で、前年度(2024年12月時点)より19.2ポイント減少した。今年度、下半期については、校務分掌の割合が上位を占めたことから10月より校務補助員を配置し、弓道場やテニスコート等の環境整備を依頼するなど、校務軽減を図ることができた。 補習・模擬試験の在り方を見直すと共に休暇取得率を上げ、長時間労働による健康障害の防止に努める。
総合評価	専門学科の特性を生かし、礼儀正しい行動や言動をさせ、看護・福祉に係る専門職として相応しい人材となれるよう分掌、学科が連携を図りながら重点目標に沿って計画的に取り組んできた。特に、生徒部では低学年と最高学年を対象に、社会の中での正しい振る舞い方、制服の着こなし方について外部講師を招聘し、場に応じた適切な服装選択について学ぶ機会を設定することができた。進路部では看護師採用試験の早期化、難化に対し専攻科1年次より長所短所診断から自己分析を行い、病院研究の在り方、自己PR等の就職活動に対する意識を高める講座も新設するなど、多様性を加味した対応に努めることができた。今後は、将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らがグローバル化する社会の創り手となり、課題解決等を通じて持続可能な社会を維持させていく人材の育成を目指し学校教育の質の向上に努めていきたい。		